

二千数百年におよぶ『墨子』研究の整理

西山 尚志

本書『中国墨学通史』上下二巻は、中国国家社会科学基金研究プロジェクト（国家社科研究項目）の研究成果「中国墨学史」を基礎としたものであり、二〇〇六年一月に中国人民出版社より出版された。著者の鄭傑文氏は一九五一年生、現在山東大学文史哲研究院教授・同研究院簡帛学研究所所長。同氏は現在まで二十本近くもの専著をはじめ、『穆天子伝』や『戦国策』などに関する数多くの論著を世に送り出しているが、とりわけ『墨子』に関する論著が多く、今日まで国内外から高い評価を受けている。

一言で言えば、本書は戦国期以来の墨家・墨学の流れや、『墨子』という書物の伝播・整理状況を丹念に追跡したものである。『韓非子』顕学篇には「世の顕学は儒墨なり」とあり、墨家は戦国時代に

おいては儒家と並ぶほどの勢力を誇っていた。しかし、秦の始皇帝の天下統一後ほどなくして衰退の一端を辿り、急激に歴史の表舞台から消えていく。その後、墨家思想や『墨子』という書物は細々と命脈を保っていくが、近代特に清代以降再び脚光を浴びるようになる。本書は、この流れを豊富な例証と丹念な先行研究の整理をもつて説き及んでいる。

本書の緒言によれば、著者は執筆にあたって、三千種近くの古籍調査を基礎とし、二百十余りの著作から数千の研究資料を選び出して研究を進めている。緒言などを参考にしながら本書の分析方法をまとめると、以下の三点が挙げられよう。

①戦国諸子および同時期の資料から、墨子・墨学・墨家への評論紹介と『墨子』の引用・評論を収集。ここから墨学形成

鄭傑文著

中国墨学通史（上下）



人民出版社
2006年 [5827円]

史の研究・調査を行う。

②秦漢から清末の古典文献中から、墨子・墨学・墨家の評論紹介と『墨子』の引用・評論を収集。ここから漢代から清代までの墨学伝播の歴史を研究する。

③近現代の中国・日本における墨学研究の論著を収集。ここから、「中国歴代墨学書目及び版本」・「中国墨学論文目録」・「日本墨学著作目録」・「日本墨学論文目録」を編集する。

紙幅の関係上、多くを紹介することはできないが、評者が特に目についた本書の特徴を二点挙げたい。一点目は、本書では魏晉南北朝から元代までの墨学研究が丹念に追跡されていることである。ここでは様々な古典文献からの引用を

駆使し、この時期において細々と受け継がれてきた墨学研究史の再構築を試みている。この時期の墨学研究は、日中問わずあまり注目されてこなかったのではないだろうか。資料上の関係もあり、従来の墨学研究は、戦国時代～漢代におけるものと清代以降におけるものが大部分であつたように思う。しかし、本書の目次を見るだけでも、戦国期の墨学研究が一六二頁割かれてるのに対し、魏晉から元代までの墨学研究には七四頁も割かれており、墨学研究の専門著書の中でもこれは異例の分量と言える。豊富な用例を挙げている本書は、この時期の墨学研究に対して資するところが大きいだろう。二点目は、明清期から現代までの『墨子』の整理・先行研究の紹介が非常に丁寧にされているところである（本書第五～七章）。『墨子』という書物の整理・先行研究はこの時期にはば集約されているため、本書は先行研究を洗い直す上でも非常に便利で、かつ参考になる。『墨子』は長い間重視されず、また独特な表現を多用するため、テキストの乱れが甚だし

い。歴代の考証学者の努力によって今日ではかなりの程度読めるようになったものの、まだ検討の余地が充分にある書物である。そして『墨子』原文の再検討には、このような先行研究の洗い直しという地道な作業が不可欠なのである。

著者が本書を執筆するにあたって得たとする新見解については、本書第二～八頁における緒言の計十項目にまとめられている。例えば、本書第一章「墨学的形成与墨家的發展」では、胡適『中国哲学大綱』が言うところの第四組（耕柱篇・貴義篇・公孟篇・魯問篇・公輸篇）は、第二組（尚賢篇から非命篇まで、いわゆる「十論」）よりも原初的でかつ重要な材料を多く含んでいる、とする楊俊光『墨子新論』などの説を支持し、主にその第四組から墨家初期の活動内容を再構築している。なお、この第四組が第二組よりも原初的であるかどうかといった『墨子』のテキスト形成に関する問題は、日本の墨子研究では、渡辺卓『古代中国思想の研究』（創文社）や浅野裕一『墨子』（講談社学術文庫）などがそれぞれ異なる考え方をもってお

り、本書の見解は興味深い。その他、本書第一章第三節では、『墨子』所引の『尚書』を分析した上で、梅賾が古文『尚書』を偽作したとしてきた伝統的観点は見直す必要があるのではないかと主張している。このように、本書が得たとする新見解には、中国古代思想史研究や古典文献研究など様々な方面に対して今後波紋を投げかけるような主張がいくつか挙げられている。

なお、本書では近年になって発見され始めた新出土文献に対してもいくらかの注意が払われている。本書第二章第三節の中の一部分では「出土戦国文献与墨家・墨学」として、一九九三年に出土した郭店楚墓竹簡中の『唐虞之道』と墨家の関係について考察している（一六七～一七五頁）。ちなみに、本書では取り上げられていないが、近年発見された出土文献の中で、特に『墨子』との関係がしばしば指摘されているものには以下の三種が挙げられよう。（一）一九五七年に河南省信陽長台関より出土したいわゆる「信陽長台関楚簡」には、『墨子』の佚文と

言われている残簡がある。(2) 一九七二年に山東省臨沂銀雀山より出土したいわゆる「銀雀山漢簡」には、『墨子』の佚文と言われている残簡がある。(3) 一九九四年に香港の骨董市場で発見され、上海博物館が買い取ったいわゆる「上博楚簡」中の『鬼神之明』は、『墨子』の佚文と言われていた。

評者は、この「佚文」という表現に対しては慎重に用いるべきだと考えている。特に、(3) の上博楚簡『鬼神之明』については、『墨子』の佚文であるとすると考えに反対論者も多い。しかし、いずれにせよ上記三種の出土文献は、『墨子』あるいは墨家と強い繋がりがあることは間違いないだろう。本書では、これらの資料については部分的に関係論著目録に収められているのみである(特に出版時期の問題で、(3) には言及されていない)。しかし、これら『墨子』関係の新出土文献は、従来の『墨子』研究の整理を充分踏まえた上で進められるべきものであって、新たなステージに属する問題である。議論の余地がまだ多分に残る新出土文献

に対し、この程度の言及にとどめておいた姿勢は堅実であるし、決して不足であるとは思わない。むしろこの方が、新出土資料発見以前における『墨子』の文献整理研究史がはつきりと浮きばられているように思う。

今後、これからも陸続と発見されてゆくであろう出土文献によって、墨家研究もまた新たなステージへと突入してゆくことは間違いないであろう。実際この十数年では、郭店楚簡・上博楚簡といった出土文献の発見によって戦国文字の解説が一気に加速し、それによって先秦から漢代における儒家研究や道家などの諸子研究が猛スピードで進展した。まだ公開されていないものの、今後の古典中国学に大きな影響を及ぼしそうな出土文献の発見報告も続々とされている。もはや十年後の古典中国学がどのような形になっているのか、想像さえできないのは評者だけではないだろう。そのような潮流の中、我々が忘れてはいけないのは、この猛スピードの進展が成り立ったのは、従来のしつかりした文献整理や先行研究が

基礎にあったからであるということである。歴代の墨学研究史を豊富な資料と充分な用例もって整理し直している本書の作業は、新しいステージへの基礎資料として大きな貢献を果たしてくれると信じている。

(にしやま・ひさし 山東大学文史哲研究院 博士生)

■「満洲国」文学研究会

第14回定例研究会

▼3月28日(金)午後1時半より

▼八雲会(東京都立大学同窓会)クラブ(渋谷区宇田川町一―二―三 ニュー渋谷コーポラス10階1001号室)

【プログラム】

「1研究発表」『満洲国』成立以前の奉天における中国人商工業者(上田貴子・近畿大学文学部教員)／戦時下における袁犀とそのアイデンティティ(陳玲玲・北京市社会科学院助理研究員)

「2研究会からの報告」年度活動／年度会計／紀要論集『中国東北文化研究の広場』についてなど

* 定例研究会終了後、懇親会を予定。